

3世紀から7世紀に東南アジアに存在した扶南国は、中国南朝齊と梁代に多くの仏教関係の人と文物をもたらした。この『文殊問経』もそのなかの一つである。

その内容は、「文殊問経は十七品中に五の戒品をもつ准戒経である」といわれる如く戒を主体におき、さらに仏教教理を短くまとめ、部派仏教の歴史、サンスクリット「字母品」、そして在家出家に対する修道を説き、最後に「花の呪文」で終わる。非常に多岐に亘る内容に富んだ経典になっている。

そのなか例えば「食肉の許可」や「二十六の邪見」などは、『旧唐書』盤盤伝に「有仏道士祠、僧食肉、不飲酒」や『南齊書』扶南伝に「天部を祭り仏法も盛ん」であるというように、扶南の地域性や宗教事情からの影響を見ることができよう。

扶南の地での変容という立場で、同時に輸入された二つの『文殊般若経』をみる。経録には「曼陀羅仙訳」と「僧伽婆羅訳」の二つを同一経典の初訳と二訳と評価している。しかし玄奘訳の『大般若経曼殊室利分』を加え比較すると両訳の差違がみえる。

まず「羅仙訳」と「玄奘訳」は訳語の違いは当然として、内容の共通する事実には驚かされる。しかし文殊般若の修行方法の中核と思える、羅仙訳の「一行三昧」、玄奘訳の「一相莊嚴三摩地」に相当する記述が「婆羅訳」に於いては大きく割愛され、また「婆羅訳」には「世尊の肉髻から放たれた光明が、文殊の頂に入り再度頂より出て大衆を照らす」という文殊の奇瑞が挿入される。「羅仙訳」がインド的であり「婆羅訳」には扶南の影響を考慮する必要がある。このような作業が『文殊問経』においてもなされたのではないか。

では如何なる意図で変容したか。発表者は、タイ仏教に一日一夜の潔齋が見られるように『文殊問経』は在家者に入寺を促すことを目的にしたと考える。一連の戒の説明をした後に「菩薩受戒品」の受戒、「嘱累品」の「菩薩一日修行此定。過去未來現在衆生。所修功德。不及此定百千萬分之一。」の修道に、八齋戒の持戒と齋会を見るからである。

この経の中国での受容はどうであったか。僧伽婆羅伝によれば「初めて経を翻ずるの日、壽光殿に於て武帝、躬ら法座に臨んで其文を筆受し、然る後、乃ち譯人に付して其の經本を盡くさしめ、沙門寶唱、慧超、僧智、法雲、及び袁曇允等に勅して、相對して疏出せしむ。」とあり、梁武帝のこれら経典群への関心の深さがわかる。この後も扶南国からの仏教輸入が続けていることから、その期待するところが伺える。また齋会講経を盛んにし、真の大乗仏教をもとめるという取り組みが理解できる。

このことは智顛にも影響を与えているといえる。四種三昧を始めとするその修道の姿勢には在家者に配慮する態度があり、それは『文殊問経』の修道方法を使用する意図もここにみることができよう。

キーワード 文殊問経 文殊般若 齋会

文中参考文献

『大乘戒経の研究』大野法道著

国訳一切経「般若部六」椎尾辨匡訳 第七曼殊室利分解題

新国訳大蔵経『文殊師利問経』及川真介訳